

ノルデン博士 グループワークメンター



石津 真樹
物質理工学院応用科学系
宍戸研究室・博士課程2年



<これまでの海外経験・サークル等>

- ・グローバルインターンシップ
2016年12月5日から90日間、アメリカ合衆国フロリダ州のベンチャー企業にて研究活動に従事
- ・OPTICS & PHOTONICS International Exhibition：2017年4月パシフィコ横浜にて、前述の米国企業の研究員とともに企業の製品展示
- ・[環境エネルギー協創教育院](#)

世界最高レベルの科学者の知性に触れることができ、かつそうした科学者と高校生とのグループワークが斬新だと思い参加しました。

私は学生メンターとして、Dr. Nordén先生と高校生とのグループワークの内容を考えました。事前準備では、予め提示された「若い科学者が成功するのに重要なものとは何か？」などの抽象的な議題からグループワークの流れを組むのが難しく、メンター同士で何度も集まったりオンライン会議を開いたりしました。

Nordén先生はノーベル化学賞選考委員会委員長を務められており、科学者として非常に経験豊富な方です。当日はその経験から、忍耐や独自性が科学者にとっていかに重要か語っていただきました。また、他のメンターとともに、高校生自身の体験から科学的思考へと導き、科学者の心がけへと発展させたことは、高校生たちのみならず私達としても刺激になりました。

今回のような優れた科学者との交流を今後も国内外問わず行いたいと思います。

川口 碧
工学院情報通信系
長谷川研究室・博士課程2年



<これまでの海外経験・サークル等>

- ・東工大における女子高生のためのツアー参加
- ・地方の高校生のキャリア支援プログラムの運営

学生メンターに応募した理由は、もともと高校生の進路選択の幅を広げるため、大学院生や社会人との接点を作る活動をしており、今回はノーベル賞受賞者と高校生との接点として興味があったため、単純に世界の科学者と議論して見たいと思ったためです。

得に苦労した面はありませんでしたが、担当のグループにつく科学者の方と前日に打ち合わせをして進行しなくては行けない部分は、気を遣いました。また、高校生とのグループワークでは英語力の差に関係なく議論ができるよう、司会進行を工夫したりしました。

今回はメンターという立場で参加させて頂きましたが、世界の科学者と触れ合ったことで自身が科学者としての姿勢やモチベーションを初心に返すことができました。高校生とのグループワークでは、予想以上に参加高校生が議論を深めることができ（議題は科学的発見についてでした）、型にはまった学問そのものの前に「自身の興味や関心」を大切にすべきだということを改めて感じさせて頂きました。

古賀洋一郎
工学院機械系
轟研究室・博士課程1年



<これまでの海外経験・サークル等>

・RLISS (A Rocket Launch for International Student Satellites) 2014 mission competition 3rd prize

・国際学会 3件
Korea-Japan Joint symposium on Composite Materials 2015
SAMPE Long Beach 2016
Next Generation Transport Aircraft Workshop 2016

私はノーベル賞という離れた世界を体験するために本シンポジウムの学生メンターに応募しました。自分自身が仮説し実践している成功する人間の共通点が世界トップレベルの研究者にも通用するのを知ることが、今後の自分に価値ある経験となると考えていて、実際にそれを確かめることができたのも私にとって大きな収穫でした。

私は既に企業に属して働いており、準備にはあまり参加できませんでしたが、今回のイベントを通じて参加する学生に何を体験しどう今後に活かしてもらうかを考えるのは、人を育てることや、より価値の高いワークショップを運営するときの良い指標になったと思います。

本番では、ノルデン先生がワークショップ序盤で想定していない(しかし魅力的な)問題提起をした際に、事前に準備していた方針から当日の新しい問題提起に合わせた方針に転換し、参加者が満足できる内容にできたことは良い成功体験だったと私自身満足しています。

崎村広人
物質理工学院材料系
中村・史研究室・博士課程1年



<これまでの海外経験・サークル等>

・ミュンヘン工科大学(ドイツ)2年間(修士課程ダブルディグリープログラム)

・野球部(小学校~大学)

ノーベル賞級の科学者と一緒にシンポジウムを作り上げることが面白くない訳がない—そう感じた私は学生メンター募集のポスターを見た瞬間に応募を決めました。すべて終わった今、この直感は間違っていなかったと素直に思います。

シンポジウムの2日間はもちろんですが、準備段階で学生同士、時には先生方も交えながらグループワーク(GW)の内容について語り合ったことが最も印象に残っています。参加者の高校生にGWで何を考えてほしいのか。それを通して何をもち帰ってほしいのか。これらは普段の研究生活にはない視点からの発想が必要で、議論を重ねるたびに自分自身の視野が広がっていくのを感じることができました。

そんな充実感を得ることができたのも、共に準備を進めたグループのメンバーや担当の先生方、裏で支えてくださった職員の方々からこそです。本当にありがとうございました。この経験と出会いを次なる「面白いこと」に繋げることが私の次の目標です。

